

令和6年能登半島地震被災者・支援者証言収集事業 ～七尾市～

団体名●バイヤーゼミ／代表者名●バイヤー アヒム（人文学部国際文化学科・教授）

はじめに(背景・目的・目標)

石川県が主催する「令和6年能登半島地震アーカイブ」への貢献として、大学コンソーシアム石川は「令和6年能登半島地震被災者・支援者証言収集事業」を開始した。この事業の目的は、「令和6年能登半島地震の被害状況や復旧・復興の過程で得た教訓・ノウハウ等を後世に継承するとともに、国内外に共有し、今後の災害対策や防災教育等に活かしていくため、被災者・支援者それぞれの立場で、どのように対応し乗り越えてきたのか、今回の経験からどのような教訓を得たのかなどの証言を収集すること」にある。

活動内容

そのため、穴水町、志賀町、七尾市、能登町、輪島市、珠洲市の各地域を対象として、大学生とその指導教員による6つの団体の募集が行われた。星稜大学の団体はバイヤー専門セミナーの学生によって構成され、七尾市で発生した出来事に関する7件のインタビューを担当した。6件は七尾市役所で、1件は穴水駅で実施された。

成果、結果の考察

星稜大学の団体が実施した七件のインタビュー対象者は以下のとおりである。第一はのと鉄道株式会社の職員で、運行中に被災し乗客対応を行った。本社が被災していたため、証言は穴水駅で収録された。第二、第三は七尾市消防職員（署長補佐）で、発災時の現場対応について語った。第四は一般社団法人支援支援ウエストの代表で、1月初旬から石崎町に入り、自主避難所の運営や被災家屋の片付けなどに取り組み、旧石崎保育園を拠点に活動を市全域へ拡大した。第五は旧天神山小学校長（現石崎小学校長）で、避難所開設と初期対応の様子を資料とともに証言した。第六は公立能登総合病院の診療部長で、断水下での救急患者受け入れや透析対応など、医療現場の状況を説明した。第七は矢田郷地区まちづくり協議会防災部会元会長で、避難所運営の責任者として活動し、令和6年度自主防災組織等知事表彰を受賞した。

今後の課題、展望

発災から一年余が経過し、能登地域は復旧から復興への移行期を迎えている。今後の課題は四点に整理できる。第一に、地震の記憶と教訓を風化させず継承・共有すること。第二に、残る被害の修復を着実に進めること。第三に、将来の災害に備えた防災・減災体制を再構築すること。第四に、地震後に進行した少子化や人口流出を踏まえ、地域経済と文化の持続的発展を図ることである。これらを進めるうえでは、地震の記憶を継承しつつ、被災地外との連携と支援を継続的に確保することが重要である。

全団体によって実施されたインタビューの編集全文は、以下のリンクから閲覧することができる。
<https://noto-archive.pref.ishikawa.lg.jp/story>



のと鉄道の車両内



七尾市市役所内